

に、菅なるも絹なるもあり、こゝろとゞめて見ざれば、あやまりぬべし。西宮記十一の卷に、件廂敷
信濃廣筵四枚、中敷毳代とあるは、竹菅やうのむしろにて、あら／＼しければ、毳代をうへにまけ
るにぞあらん。同記十九の卷に、夏不敷菅圓座敷出雲筵とあるも、同じやうの筵とおもはる。江家
次第三の卷に、敷膝突小筵爲參議座とあるは、よき人の座なれば、よきむしろにぞありけん。源氏
物語夕顔の卷に、御車よす、此人をえいだきたまふまじければ、うはむしろにおしく、みて、惟光
のせてまつる。また、かにしもえせねば、髪はこぼれいでたるも云々とあるは、きぬのむしろ
にて、萬葉集の歌によめる。綾むしろのたぐひなめり、夕顔のうへのまきてねたまへるものに、そ
のま、つゝ、みたるさまにて、やはらかなるむしろと見ゆ。うはむしろといふは、またにもまき
て、うへにまきゆるにさいへり。西宮記十八の卷に、設冠者親王座用土敷二枚并表席褥とあるにてもま
れたり。大鏡五の卷に、たゝみのうはむしろにわたいれてぞ、まかせたてまつらせたまふ。ねたま
ふときには、大なるのしもちたる女房三四人出て、かのおほとのごもるむしろをば、あたゝか
にのしなで、ぞねさせたてまつりたまふとあり。たゝみとは、たゝみかさねたるうはむしろを
いへるにぞあらん。のしなで、といへるやう、きぬのむしろなり。又古歌に、狭むしろに衣かたし
きひとりぬるよしによめるは、ねやにいらす。うたゝねしたるさまにて、今の世に小ぶとんとい
ふものまきて、まろねしたるさまなれば、これもきぬのならんとぞおもはる。さればいにしへ
むしろといひつる中には、竹なるもあり、菅なるもあり、絹なるもあることをこゝろえて、ふるき
書をば見るべきことになん。

〔堤中納言物語〕よしなしごと

たびのぐにまつべきものどもやはんべる、かさせ給へ中略むしろはありそ。うみのうらにうつ
なる、いづもむしろにまれ、いきの松ばらのほとりにいでくなる。つくしむしろにまれ、みるをが